

⑤まとめ

旧八百津発電所は、明治末期に建設された大容量水力発電所の先駆けの一つであり、わが国の電力技術が欧米の技術導入段階から自立する過渡期の産物であった。その過渡期の産物たる特徴は、後の技術水準からみればダム式の適地に水路式を選択したこと、そのことによって河川利用に関する地域住民との矛盾の顕在化を避けたこと、当初の発電技術に種々の問題を含んでいたこと、建設当時のわが国では最高水準の高電圧、長距離送電を実施したことなどに顕著にみられる。

技術水準という点に限ってみれば、設計に際して水路式を選択したことにもなう建設工事費の増大、施工期間の長期化などの難点が生まれた。外国製の水車選定に関しても、検査のための試運転に際して水車ケーシングの破裂事故に見舞われる不幸もあった。発電機の位置（高さ）設定に関しては、予想洪水水位を過大に見積もったために利用し得ない落差が生じた。これらはいずれも、この発電所建設が技術史上の過渡期にあったことを如実に物語っていた。

しかしその後は、水車を改良し、損失落差の解消をめざし、放流水を再利用するために4台の露出型水車からなる連成水車を導入したわが国でも珍しい放水口発電所を設けるなど、わが国の電力技術の発達が存分に生かされた。

この放水口発電所の設置以外には大規模な修復もなく、より効率のよいダム式発電所にその地歩を譲るまで63年間にわたって稼働し続けた。こうしたことは、この八百津発電所がわが国電力技術の発展を実物をもって後世に示す貴重な産業遺物たり得ることを物語っている。

参考資料 加藤博雄、高橋伊佐夫「旧八百津発電所」『日本の産業遺産』玉川大学出版部

『関西電力水力技術百年史』関西電力株式会社